

# まがたま 勾玉



体験で制作した勾玉

## 古代の不思議なアクセサリー

**概要** 玉作について学び、軟らかい石を削って実際に勾玉を作る。

**ねらい** ①勾玉の役割や、その形もつ意味などについて考える。  
②出雲地方に特徴的な勾玉作りの技術や工夫について考え、体験する。

**所要時間** ●ロングバージョン(粗割工程から始める場合)120分  
●ショートバージョン(削り工程から始める場合)90分

**必要なもの** **材料** (値段は一人分の目安) 滑石またはろう石……約70グラム(50円~)  
※教材店・石材店で購入できます。価格は材質・数量によって異なります。詳しくは当センターまでお問い合わせください。

**道具** ドリルまたはキリ、木の板(下敷用)、コンクリブロックまたは粗い砥石、金ヤスリ、紙ヤスリ(耐水ペーパー)、段ボール(仕上げ磨き用)、紐(80cm程度)、軍手、水入れバケツ、鉛筆(粗割工程に必要なもの)金づち、タガネ、保護メガネ(ゴーグル)、油性ペン

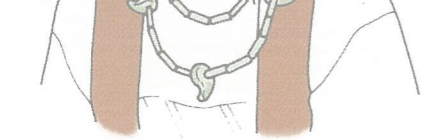
## まがたま 勾玉とは

弥生時代から古墳時代にかけて、美しい石を磨いた「玉」といわれるものが盛んに作られました。よく知られている勾玉や筒形の管玉のほか、時代によって「切子玉」「平玉」「棗玉」など様々な形の玉があります。

三日月のような勾玉のデザインがどこから誕生したのか、正確にはわかっていません。動物の牙の形から発展したとか、産まれてくる前の赤ちゃんの形であるとか、いろいろな説が出されています。

いずれにせよ、勾玉の独特の形は古代の人々にとって特別なものであったようです。魂の象徴であり、まじないの力を持つと考えられていたという説もあります。

勾玉が普通の集落から出土することは少なく、多くは死者が身につけた状態でお墓から出土します。大きな古墳に葬られた有力者の墓からは多量の玉が出土することが多く、美しい玉をたくさん持つことは権力を示す意味もあったようです。このように、勾玉をはじめとする玉には、単にアクセサリーという役割以上に呪術的な役割や、権威を示す役割など複雑な側面がありました。



## 勾玉の素材

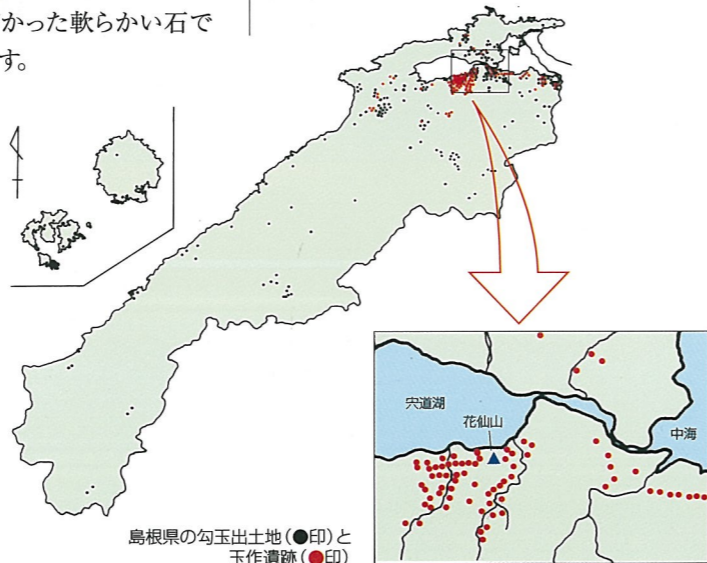


メノウ 水晶 碧玉(へきぎよく)

勾玉は、身近に落ちている石を磨けばできるというものではありません。透明度が高いものや、発色の美しい素材が選ばれていました。メノウ(赤色)や碧玉(緑色)が代表的ですが、ヒスイ(緑~白)、水晶(無色透明、紫などの色がついたものもある)なども使われました。このほか祭祀専用には滑石という灰色がかった軟らかい石で作られたものもあります。

ほとんどの勾玉は、石素材を割ったり磨いたりして作るものですが、ごくまれにガラスを溶かして型に流して作ったものも出土しています。

※専門的には赤いものだけをメノウと呼び、一般に「青メノウ」と呼ばれる緑色のものは碧玉と呼んでいます。



島根県の勾玉出土地(●印)と玉作遺跡(●印)

## 島根出土の勾玉と玉作

島根県出雲地方は古くから玉作りが盛んだった地域です。特に古墳時代に入ると他の地域で作られなくなっていくのに対し、出雲地方では最盛期を迎えます。松江市玉湯町にある花仙山はメノウ・碧玉の産地で、この周辺では玉作りをおこなっていた遺跡が集中してみつかっています。

さらに時代がくんだり奈良・平安時代になると、全国でも玉作りは出雲だけに限定されるようになりました。

このように出雲地方の特産品であった玉は、最終的に大和玉権・朝廷に献上され、そこから全国各地に配られたことが明らかになっています。

# 勾玉を作ろう!

実際に使われたメノウなどの石材はたいへん硬く削りにくいため、体験では軟らかい石(滑石・ろう石)などを使います。硬い石を見事に磨き上げる古代の工夫と技術を念頭に置きながら作業するようにしましょう。

## 【古代の製作工程】

<b>と 採る</b>	<b>わ 割る</b>	<b>けず みが 削る・磨く</b>	<b>あな 孔をあける</b>	<b>仕上げ・完成</b>
材料となる原石を採る工程です。海浜や河原などに転がっているものを拾う場合と、岩盤の表面に露出している鉱脈から掘り出す場合があります。	石をハンマーやタガネのように使いながら、原石を叩いて破片を取り出します。発色の良い部分を選び、大きさや形を整えていきます。石にはもともとの割れやすい方向がありますから、ねらった破片が取り出せるように見極めが肝心です。	初めは目の粗い砥石を、徐々に目の細かい砥石を使いながら、形を完成品に近づけていきます。勾玉の背中の丸味をもった部分は筋の入った砥石を、内側のえぐれた部分は棒状の砥石を使います。	おおよその形ができたなら、キリを使って孔をあけます。キリの先端は鉄製だけでなく、石製のものも使っていた時代もありました。正確に貫通させるのはたいへんな技術と根気が必要です。	目の細かい砥石や、磨き板などを使って、仕上げの磨きをかけて完成です。完成にいたるまでには、思わぬところが欠けてしまったり、全体が割れたりするなど失敗が多く起きました。玉作遺跡から出土するのは、こうした失敗品やクズが大半です。

※あらかじめ直方体に整形したキットなどを使う場合には、この工程は必要ありません。

**1 粗割り (原石を小さく割る)** 所要時間 30分

①割れやすい原石のすじ(石の目)を良く見て、タガネを当て金づちで叩きます。できあがる勾玉の形や大きさを考えながら、程よい大きさになるまで割っていきます。

! 破片が飛び散るので、必ず保護メガネをかけ、軍手をはめましょう。

②程よい大きさに割れたら、不要な部分を金づちで直接叩いて落とします。指を叩かないよう注意してください。難しいようなら台の上で叩くのが良いでしょう。

**2 削り1 (平面形を整える)** 所要時間 20分

①仕上がりの形を考えて、油性ペン・鉛筆で輪郭を書きます。

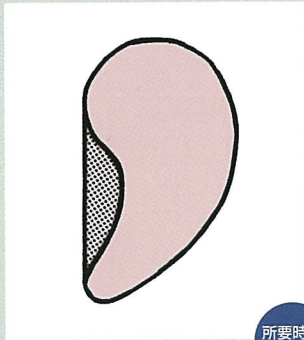
②ブロックなどの平面を利用して、不要な部分を削ります。角度を少しずつ変えながら、ちゅうちよせす思い切った削ることが早く仕上げるコツです。

✗ 手をケガないように、必ず軍手をして作業しましょう。削りかすの粉がたくさん舞うので、屋外でシートなどを敷いて作業すると後片付けが楽にできます。

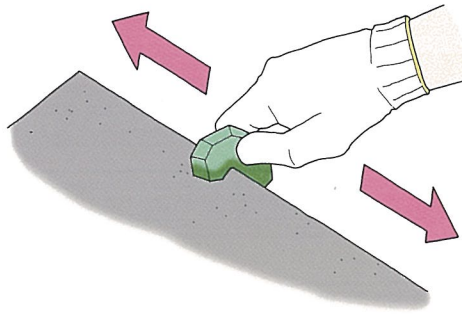


3

### 削り2 (内側のえぐりを作る)



所要時間  
15分



内側のえぐりを作るにはブロックの角などを使います。削る位置や角度を少しずつ変えながら、徐々に曲面に近づけていきます。油性ペンで書いた平面形どおりになるよう根気強く削りましょう。



特に指先を傷つけやすい工程なので、慎重に。

コツ



ヤスリの丸い面を使えば、早くきれいに仕上がります。

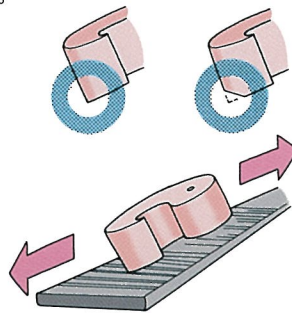
4

### 削り3 (角を落として丸みをつける)



所要時間  
25分

角張った部分を削り落とし、全体が丸味をもつよう形を整えていきます。角がブロックの面に当たるよう、少し起こした状態で角度を固定し、前後して削ります。角度を微妙に変えながら削ることで、だんだん曲面に近づいていきます。



コツ



ヤスリを使って削る場合は、ヤスリを固定して石を動かすほうが安定して効率よく削れます。

全体に角が取れて思い通りの形になったら、削り工程は完了です。

5

### あな 孔あけ (紐を通すための孔をあける)



所要時間  
10分



①ドリル・キリを使って孔をあけます。2人組になり、1人が固定しながらおこなうと良いでしょう。せっかく完成に近づいたのに、この作業中に割れてしまうことが多いので注意が必要です。あまり押しつける力を入れすぎないようにするのが、割れないコツです。それでも割れてしまった場合は、石の目(筋)のせいですので、残念ですがあきらめて。



②首にかける紐は太さ2ミリ程度のものが最適です。小学校高学年の場合、1人あたり80センチほど必要です。

6

### 磨き (表面をなめらかに仕上げる)



所要時間  
20分



コツ



内側のえぐれた曲面は、鉛筆や指などに紙ヤスリを巻き付けて磨きます。

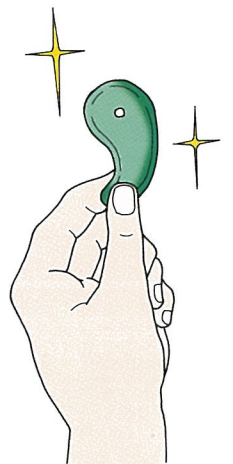
①紙ヤスリを使って表面を仕上げます。最初は目の粗いもの(#80程度)を使い、削り残した凹凸が無くなるよう強く磨きます。磨きキズがつきますが、後で消えますのでかまいません。

②段階的に紙ヤスリの目を細かくして表面をなめらかに磨きます。中細目(#180程度)から細目(#400程度)が良いでしょう。最後に水をつけ、最細目(#1000程度)の耐水紙ヤスリで磨くと細かいキズが消え、つるつるの表面に仕上がります。

コツ



段ボール紙や布で磨くと、さらに光沢が出て、美しい輝きを放ちます。



紐を通して…  
**完成!**